

書評

看護コミュニケーション
基礎から学ぶスキルとトレーニング

- 著 篠崎恵美子／藤井徹也
- 定価 本体 1800 円＋税
- 医学書院

評者

聖隷三方原病院 看護部長
吉村浩美

患者さんと向き合う、
コミュニケーションスキル

コミュニケーションを思索する

コミュニケーションのことを扱った書籍は一般書から専門書まで数多く出版されており、誰もが1冊くらいは読んでいるテーマでしょう。私たちは、何らかの意味を伝え、分かり合うためにコミュニケーションを用いますが、同一の文化圏で共通言語を使用しているにもかかわらず、他者と分かり合う難しさを感じているのではないのでしょうか。

特に看護においては、ナイチンゲールが『看護覚え書』の補章において、「自分自身が決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力をこれほど必要とする仕事は他に存在しない」と述べているように、看護師は自らが感じたことのない状況にいる患者さんからのメッセージを受け取り、その意味を深く推察しながらフィードバックする、つまりは理解し合うことがとても大切な仕事です。

また、患者さん自身が伝える言葉を持たない場面やどのように伝えようかと模索していることもあるでしょう。そのため、著者は非言語的コミュニケーションもあらゆるコミュニケーションにおいて重要であると述べています。

本書は看護教員の立場から、コミュニケーションを知識の習得だけでなく、トレーニングを含めたコミュニケーションスキルとして教育し、患者さんに向き合う必要性を説いています。そのために、知識を得て確認テストで自身の考えを振り返り、さらにロールプレイ用シナリオを活用してスキルが習得できるように構成されています。このような展開により、視聴覚教材よりも、自問自答する、思い巡らすなど、読者自らが思索する時間を大切にできるのではないのでしょうか。

人との関係性を大切にするために

著者は、患者さんから信頼を得るためには、積極的傾聴と共感が重要であるとし、「積極的傾聴により相手の話に耳を傾け、批判や判断をすることなく相手の話を受け入れる気持ちや、相手の興味関心ごとに焦点を当てることに集中することが、ケアリングにもつながり、共感にもつながる」と述べています。スキルを持たない看護師の唐突な質問や不用意な返答は、患者さんを混乱させ、看護師への信頼をなくします。読者には本書の2部「看護におけるコミュニケーション」から知識を学び、トレーニングを積んだ上で患者さんへ向かってほしいと期待しています。

もうひとつ面白い構成が、word 欄とコラム欄であり、あるコラムでは前頭葉と扁桃体の活動を調べた Lieberman らを引用し、感情を「語る」ことで前頭葉が活性化され、恐怖や不安といった感情をコントロールすることができると紹介しています。興味深く読者を引き込み、著者が知識として伝えたい内容をより分かりやすくしてくれます。

臨床家である私は、本書で語られる場面に「そうそう、こういった場面は本当に悩むのよね」と、そのリアリティに引き込まれます。そして著者から、コミュニケーションを通して人と人（患者さんと看護師）の関係性を大切にしていこうという、看護学生や看護師に対しての優しいメッセージを受け取ることができるのです。

本書は、看護学生や看護師、看護教員へ向けて書かれていますが、例えば、家族や友人が病気になったとき、その人に寄り添う“人”として読み進めてみても意味の深い1冊になっていると思います。